

# 校長通信 (教職員版) 第42号 2018. 7. 2

## 大学入試改革とキャリア教育

### 【1】はじめに

6月24日午後から関西大学で日本キャリア教育学会第36回研究セミナー(近畿研究地区部会)が開催されました。北部大阪地震への対応、奨学金業務における不祥事など、心身ともに疲れていましたが、アカデミックな空間に身を置くことで、頭を使う所も変わりストレスも解消するだろうと思い、参加しました。期待していたのは、大学入試センターの大杉住子氏による「共通テストとキャリア教育」という基調講演でした。しかしながら、内容は期待したほどのものではなく、もう一つの基調講演、筑波大学の藤田晃之教授の「新・学習指導要領とキャリア教育」の話が、非常に示唆に富んでいましたので、藤田先生の話を紹介したいと思います。

### 【2】現行学習指導要領とキャリア教育の在り方

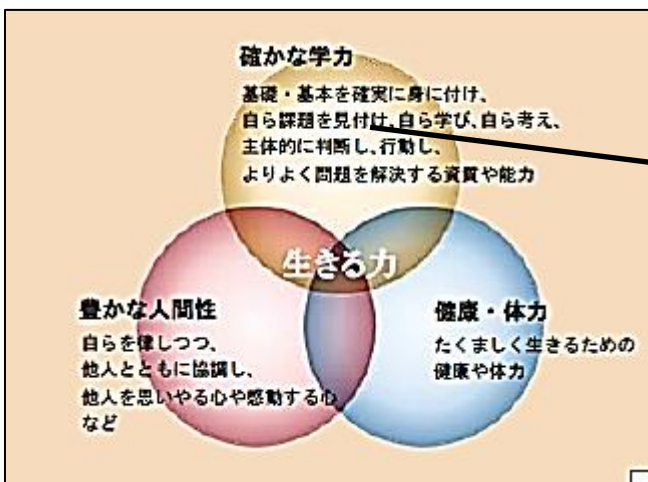
現行の学習指導要領は、平成17年2月に大臣からの諮問を受けて、平成20年1月17日に中教審答申が打ち出されました。高校は、平成21年3月9日に学習指導要領が改訂されています。その元で、今私たちは教育活動を行っているわけです。

ところで、この平成20年に出された中教審答申では、現在の状況をどのように捉えているかご存知ですか？中教審答申の中にある「今後の社会展望」には、

「知識基盤社会」の時代などと言われる社会の構造的な変化の中で、「生きる力」をはぐくむという理念はますます重要になっている。

「知識基盤社会」の特質としては、例えば、①知識には国境がなく、グローバル化が一層進む、②知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる、③知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる、④性別や年齢を問わず参画することが促進される、などが挙げることができる。

と記載されています。「知識基盤社会」がキーワードです。そして、「生きる力」とは、平成8年の中教審答申で下の図のように定義され、その中の一つ「確かな学力」については、平成19年の学校教育法の改正で次のように定義されています。



- ①基礎的な知識及び技能
- ②これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力
- ③主体的に学習に取り組む態度

ということは、藤田教授によると、現在提唱されている高大接続改革で提起されている学力論というのは、何も今回降って沸いたことではない、以前から提唱し続けられてきたことである、ということなのです。だから、藤田教授は

言います。

「次期学習指導要領は、『黒船来航』ではない！」

と。ここで、「なーんだ、そうなんだ、新しいことではないんだ・・・」と思った先生がいれば、それは理解が浅はかと藤田教授に言われるでしょう。藤田教授によると、「なぜ、ずっと提唱され続けられているのか、ということにこそ、日本の教育の問題がある」と指摘します。

### 【3】日本の教育の本当の危機

藤田教授は、会場の研究者、教職関係者に敢えて問いました。

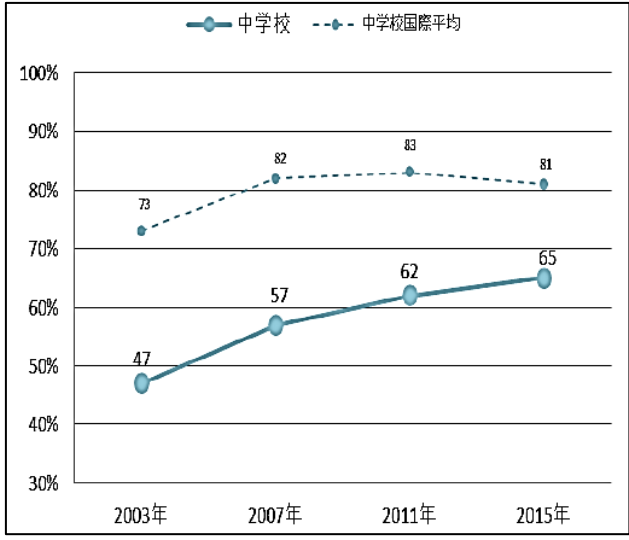
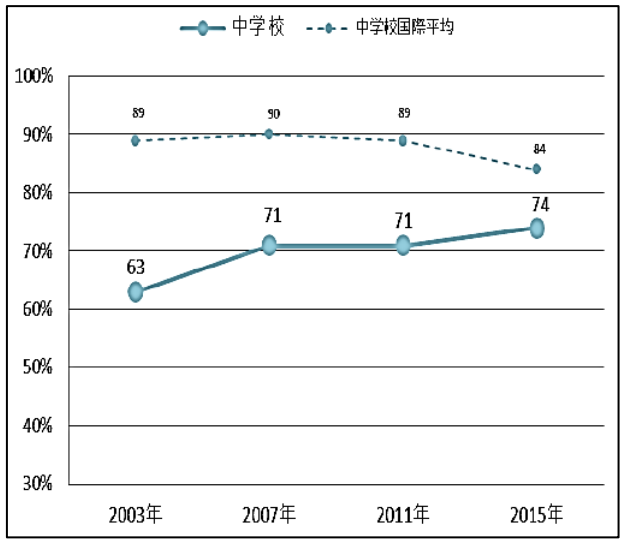
「みなさん、生徒にこんなことを聞かれたら、どう応えますか？『先生、なんでこんなこと勉強しなければならないのですか？』と『受験に必要だからじゃないか』、とか、『〇〇大学の〇〇年の入試に、この類題が出ているんだ！しっかり勉強しないと受からないぞ！』とか、言ってませんか？」

さて、皆さんはどうでしょう？なぜ、藤田教授がわざわざこのことを取り上げるかという理由をこれから紹介します。

		1995	1999	2003	2007	2011	2015
小学校4年生	算数	567点 (3位/26か国)	(調査実施せず)	565点 (3位/25か国)	568点 (4位/36か国)	585点 (5位/50か国)	593点 (5位/49か国)
	理科	553点 (2位/26か国)	(調査実施せず)	543点 (3位/25か国)	548点 (4位/36か国)	559点 (4位/50か国)	569点 (3位/47か国)
中学校2年生	数学	581点 (3位/41か国)	579点 (5位/38か国)	570点 (5位/45か国)	570点 (5位/48か国)	570点 (5位/42か国)	586点 (5位/39か国)
	理科	554点 (3位/41か国)	550点 (4位/38か国)	552点 (6位/45か国)	554点 (3位/48か国)	558点 (4位/42か国)	571点 (2位/39か国)

上の表は、TIMSS2015の結果を示す表です。一時期、『ゆとり教育のせいで・・・』と話題になりましたが、日本の算数数学・理科についての学力は、世界的にみるとかなり高い、というよりも上位トップクラスを維持していることを、この表は示しています。

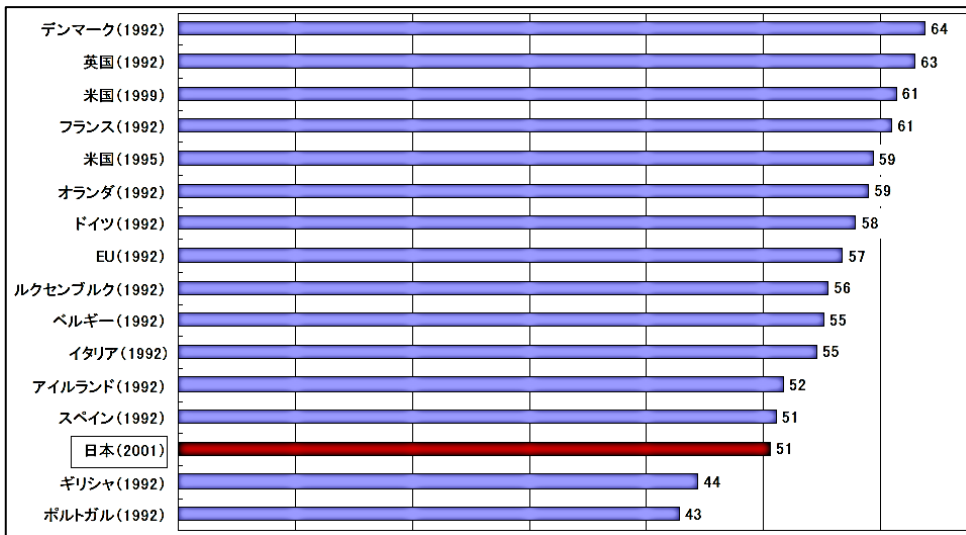
次に下の二つのグラフを見てください。



二つのグラフとも中学校の国際平均に接近しているとはいえ、2003年以降、ずっと国際平均とを下回っているのです。これは一体、何を質問したときの結果かという、左のグラフが、「数学を勉強すると日常生活に役立つ」、右のグラフが、「将来自分が望む仕事につくために、数学で良い成績をとる必要がある」という質問への肯定感の推移を示したグラフです。これは、理科についても同様の傾向です。つまり、数学・理科の大切さや意義を感じているかどうか、というところに日本の中学生は、「???」となるのです。

次に示すグラフは、

2001年に実施された「科学技術に関する意識調査」のグラフです。対象は、全国18歳以上男女（69歳まで）、3000人を対象に実施された調査です（有効回答率71.5%）。つまり、高校までの学習を終えた18歳以上の大人が、どの程度科学技術についての基礎的概念を理解しているかを問うた正答率の結果です。参加国中、日本は下位から3番目。全然良い結果ではありません。この調査で実施された、「科学技術の基礎的概念」とは、一体どんな問題だったのでしょうか？



だったのでしょか？

Q19. [回答票17] 話は変わります。この中の(1)から(13)のそれぞれについて、「正しい」か、「誤っている」かをお答えください。もし、あなたが知らない時や、自信がない時は、「わからない」とお答えください。(1)～(13)を1つ1つ聞く。)

(ア) (イ)  
正しい 誤っている わからない

という問いの後に、次のような問題が続きます。

- (1) 地球の中心部は非常に高温である
- (2) 全ての放射能は、人工的に作られたものである
- (3) われわれが呼吸に使っている酸素は、植物から作られたものである。
- (4) 赤ちゃんが男の子になるか女の子になるかは、父親の遺伝子である
- (5) レーザーは音波を集中することによって得られる。
- (6) 電子の大きさは原子の大きさより小さい
- (7) 抗生物質は細菌同様ウイルスも殺す
- (8) 宇宙は爆発によって始まった
- (9) 大陸は何万年も移動しており、これからも移動するであろう
- (10) 現在の人類は、原始的な動物種から進化したものである。
- (11) 喫煙は、肺がんをもたらす
- (12) ごく初期の人類は、恐竜と同時代を生きていた。
- (13) 放射能に汚染された牛乳は沸騰させれば安全である。

そして、その後にこんな問題まであります。

Q20. 光と音はどちらが速いと思いますか。  
1 光 2 音 3 どちらも同じくらい 4 わからない

---

Q21. 地球が太陽の周りを回っていますか、太陽が地球の周りを回っていますか。  
1 地球が太陽の周りを回っている 2 太陽が地球の周りを回っている 3 わからない  
↓ Q22へ

---

SQ. 地球が太陽の周りを回るのにどれくらいかかりますか。「1日」ですか、「1ヵ月」ですか、「1年」ですか。  
1 1日 2 1ヵ月 3 1年 4 その他( ) 5 わからない

先生方も一度チャレンジしてください。18歳以上の対象者ですから。わからなければ、理科の先生に聞いてみるのがいいでしょうね。理科の先生は、よくご存知のことだと思います。

この程度の問題で、日本の18歳以上の大人は、参加国中下位3位なのです。ここにこそ、藤田教授は、

日本の教育の本当の危機があると指摘します。つまり、次の3点です。

●学びに対する興味関心の希薄さ

●将来との関連性が見えないままの学び

●受験終了後に剥落する「知」の危険性

特に3点目の「剥落する知」の危険性を、藤田教授は厳しく指摘しています。つまり先ほど紹介した現行学習指導要領で提起されている学力の3要素があるにもかかわらず、それが活かさせていないという指摘です。特に

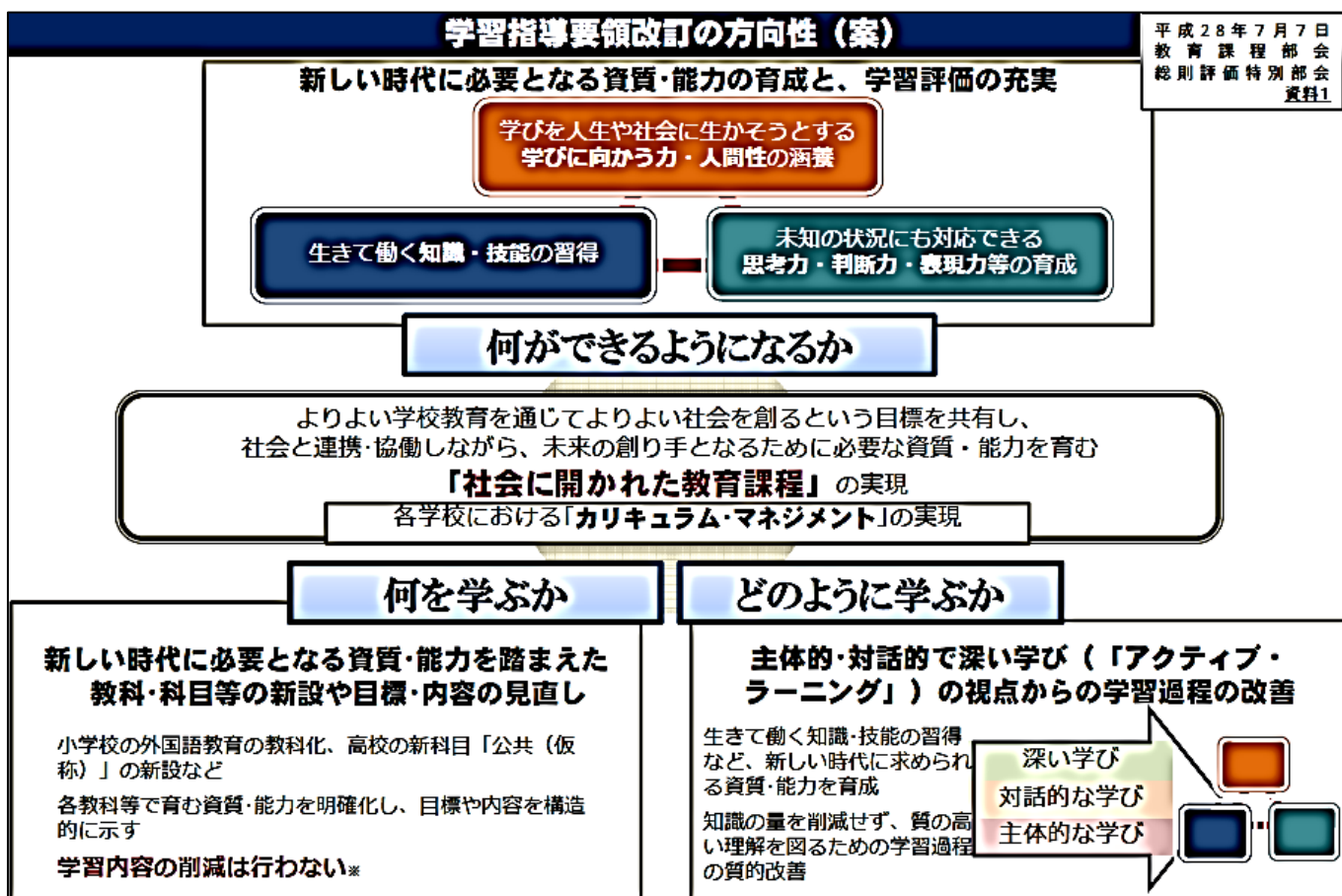
主体的に学習に取り組む態度（＝学習意欲）

こそが問題である、「日本の子どもたちの大きな課題＝学習への興味・関心・意欲だ、受験終了後、とりわけ大学合格後に『知が剥落する』危険がある!」ということです。これは、本校にとってはとても耳の痛い指摘ではないかと思い、講演を聴いていました。小中学校では、世界でもトップクラスの学力を持つ日本の子どもが、大人になればどんどん「知が剥落」していく・・・これが、日本の教育の本質的危機です。

【4】新学習指導要領におけるキャリア教育への大きな期待

(1) 社会に開かれた教育課程

さて、現行学習指導要領で提唱され続けているにもかかわらず、危機が回避されない日本の教育に対して、藤田教授は、新学習指導要領によって、好転するのではないかと大きく期待を寄せています。その期待とは、現場教師にとっては、責務に近いものなのだろうと思います。



上の図は、よくご存知のことと思います。今回の学習指導要領の骨格を端的に表した図です。「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」の3本柱ですが、真ん中に「社会に開かれた教育課程」という語句が赤字で書かれています。実は、今回の学習指導要領の改訂の大黒柱は、この「社会に開かれた教育課程」なのです。この点については、兵庫教育大学大学院でも再三再四取り上げられていましたし、私が2年間参加した高槻中学校・高等学校のAL研究会でもかなり強調されていました。そして、「開かれた教育課程」の論議の中核を担ったのが、当時岐阜大学にいた田村知子准教授（現在は、大阪教育大学連合教職員大学院教授）ということも知っていました。高槻の校長さんからは、「田村さんにもアドバイスをいただいていますよ。是非研修で呼ばれたら良いと思う」とアドバイスを頂戴していました。そこで、今回は、藤田教授も注目する「社会に開かれた教育課程」を、まずは紹介したいと思います。

藤田教授によるとこの「社会に開かれた教育課程」を言い換えると次のようになります。

★子どもたちに、情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に備えることのできる学校教育を実現する。

★学校を変化する社会の中に位置づけ、より良い学校教育を通じて、より良い社会を作るという目標を学校と社会が共有して実現する。

★これからの社会を創り出していく子どもたちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育ていく（下線部は上野）

ということになります。つまり、要約すると、「目の前の生徒が大学生になり、社会人になることを想像して、大きく変化していく社会の荒波を乗り越えていく資質・能力を意識しながら、私たちは日々の教育を行いましょう！」「そして、そのような教育目標を達成できるような教育課程（授業だけでなく、教育プログラムと理解するほうが良い）を創造しましょう」ということになると思います。これは、以前からしつこいぐらい紹介してきた、京大の溝上さん、立教大の中原さんたちが提唱する「学校と社会をつなぐトランジション」と通じるものであると言えます。私が、横浜の桐蔭学園でのセミナーに参加したときも、昔は伸びきったゴムのような生徒を育ててきた新興私立の進学校から、全然違う実践をしています。例えば、できる限り生徒を大学生や社会人とのコラボレーションに参加させています。お茶の水女子大の学生と夏休みに研究セミナーを3日間協同で行ったりしています。そこで違う世界と触れ合っているのです。そうすることで、生徒の成長は今まで全然違う、『やれと言わなくても、自らすすんで勉強する』ようになったと報告していました。昔の桐蔭学園ならば、夏休みは、進学講習一辺倒だったのでしょね。だから、私も赴任してからずっと言い続けているのです、

長期休暇には、大学や学術団体やNPOが行うセミナー、合宿、体験、などに参加させよう！

と。そうすることで、生徒は外に目が向くのです。今年初めて実施した学び未来PASSで、生徒の特徴は明確になりました。生徒は、目標未確定、現状満足派の生徒がメインであるということです。ということは、何をしているかというと、彼らがやりたいクラブ活動を毎日毎日同じように繰り返して、それで楽しい毎日を過ごしているのです。クラブ活動に教育的意義が無いとは絶対に思っていません。しかし、3年生で国公立大学の推薦入試の試験を受ける生徒の面接指導をしていると、情けなくなるのです。「ほとんど、心が成長していない、将来について考えていない、何を大学で学び、研究したいか、それをどのように社会に役立てたいか、自分の思いが無い！まるで、中学生に毛の生えた程度」ということです。クラブ活動、修学旅行、行事の思い出、まるで就職試験を受ける面接のようです。今、生徒に必要なことは、将来を見つめさせること、そして、そのために行動を起こすことです。これを溝上教授は、「二つのライフ（今と将来）を結ぶ力」と言っています。これが、生徒に決定的に欠けている力なのです。これが養われれば、教師や親がヤイヤイ勉強のことを言わなくても、週末課題や小テストをわざわざやらなくても、生徒は自分の目標に向かって動き出します。あとは、うまく手綱を操ってやれば良いのです。「二つのライフをつなぐ力」をどう養うか？私は現状満足派＝クラブ大好き派が多数いる〇〇高校で、クラブ活動より大学のセミナーなどのまったく違う世界に触れさせることに背中を押してやる必要があると思っています。

うそだと思うのなら、私が〇〇に赴任したときの卒業生のお話をしましょう。その生徒は、〇〇から現役で市大法学部に合格した生徒です。その市大に現役合格した生徒は、2年の2学期に心に灯がついたのです。なんのことはない、テレビのドラマを見ていたら、弁護士という仕事がとても魅力的に思えた。そして、弁護士になりたいと真剣に考えるようになった。そこから、猛勉強を始めた、と書いていました。先生達からみても、それまで成績もそれほど目立たなかったその生徒が、突然目の色が変わったように勉強しだしたと書いていました。「勉強しなさい」という指導を100回するくらい時間があるなら、10回「生徒の心に灯をつける」指導をするほうが、よっぽど効率的で効果があると思います。

さて、藤田教授が提唱する「社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育ていく」ということについて、布施の具体例を出して考えていただきます。

このまえ、1年生の学年集会で学び未来PASSの外部講師によるレクチャーがあったとき、最初に「スカート指導」がありました。「へー、懐かしい風景やな・・・」と思いつつ、「これってどんな力を生徒につけさせるのかをきちんと話をした上で、そしてこの指導対象（スカート）を、このような指導方法で、このようなタイミングにすることが優先順位として高いと判断されて実施されているのだろうか？」と書いていました。私は生徒のスカートが短くなっていることについて、次のように考えます。

第一に、中学時代から厳しく服装指導をされてきた反動で、自己表現の仕方を未熟にしか理解していないから、スカートの丈を変えることで自分のアイデンティティを表現したい思春期の一過性のもの。これを通じてだんだん自分らしさを見つけていく過程だろう。

第二に、ただど気をつけていなければならないのは、そういう微妙な変化の中にこそ、その生徒達の抱える問題が浮かび上がってくることがある。例えば、親子関係のひずみや変化。友達関係のひずみ。もっと気をつけなければならないのは、スマホを通じての「危険な大人社会への無防備な興味」など。

第三に、第二に指摘したことは、単にスカートの丈ではなく、生活の乱れ（遅刻・欠席・・・）、保健室への来室頻度、勉強に向かう姿勢、様々なところに現れてくる。だから、スカートの丈を短くしている生徒に対しては、そのような傾向の生徒がいなか注視しよう。

第四に、そんなことは関係なく、一過性の生徒達には、「自己実現」とか「自分らしさ」とかは何によってもたらされるのか、もっと簡単に言えば、「人の魅力は、スカートの丈で表現できるほど、底の浅いものではない」ということをわからせてあげたい

ここに書いた第4のことこそが、これからの社会を生きていくうえで必要な一つの資質ではないかと思うのですが、どうでしょう。このスカート指導、単に、自分がやってきた経験をそのまま持ち込んでいるとすれば、もう一度「何の力を養い、それがこれからの世の中を生きていく上で必要だ、それが優先順位としてスカートなんだ！」と、確証を得た上で一致団結して実施してください。そのときに「視野狭窄」に陥らないためにも、1年担任団以外の意見を聞くことは言うまでもありません。

この「社会に開かれた教育課程」というコンセプトをクラブ活動と生徒指導に照らし合わせて述べてみましたが、如何ですか？何となく理解していただきましたか？とにかく、授業や教材一つを取ってみても、FNの時間一つをとってみても、行事のありかたを考えると、「どんな資質・能力を育てるために、その教育を行うのか？」ということをも、もう一度原点に戻って考えないと、現行指導要領で折角「生きる力」を提唱されているのに、「興味関心の低下」「将来と結びつかない勉強」「知の剥落」という日本の教育の本当の危機を繰り返してしまいますよ、というのが藤田教授の警鐘です。

## (2)「どのように学ぶか」

今回の新学習指導要領の改訂で、次に特徴的なことは、「何を学ぶか」→知識・技能に加え、「どのように学ぶか」という視点が入られたことは、もう既知のことと思います。大臣からの諮問当初は、「アクティブラーニングの導入」として話題になりました。しかし、答申には「アクティブラーニング」という言葉は消え、「主体的で対話的で、深い学び」という言葉が使用されました。私もこの言葉が使われ始めた時は、「主体的で対話的で、深い学び」＝アクティブラーニングと紹介していましたが、そのほうが先生方にも理解されやすいと思っていたのです。しかし、京大の松下教授の「ディープ・アクティブラーニング」の本を読んでいたもので、いつまでもこの言い方は良くないと思っていました。学習理論の系列からして、「主体的で対話的学び」と「深い学び」については、研究の経過が違うのです。先生方も、ALについては、かなり知識も経験も積まれてきた頃だと思いますので、

「主体的で対話的で、深い学び」＝アクティブラーニング

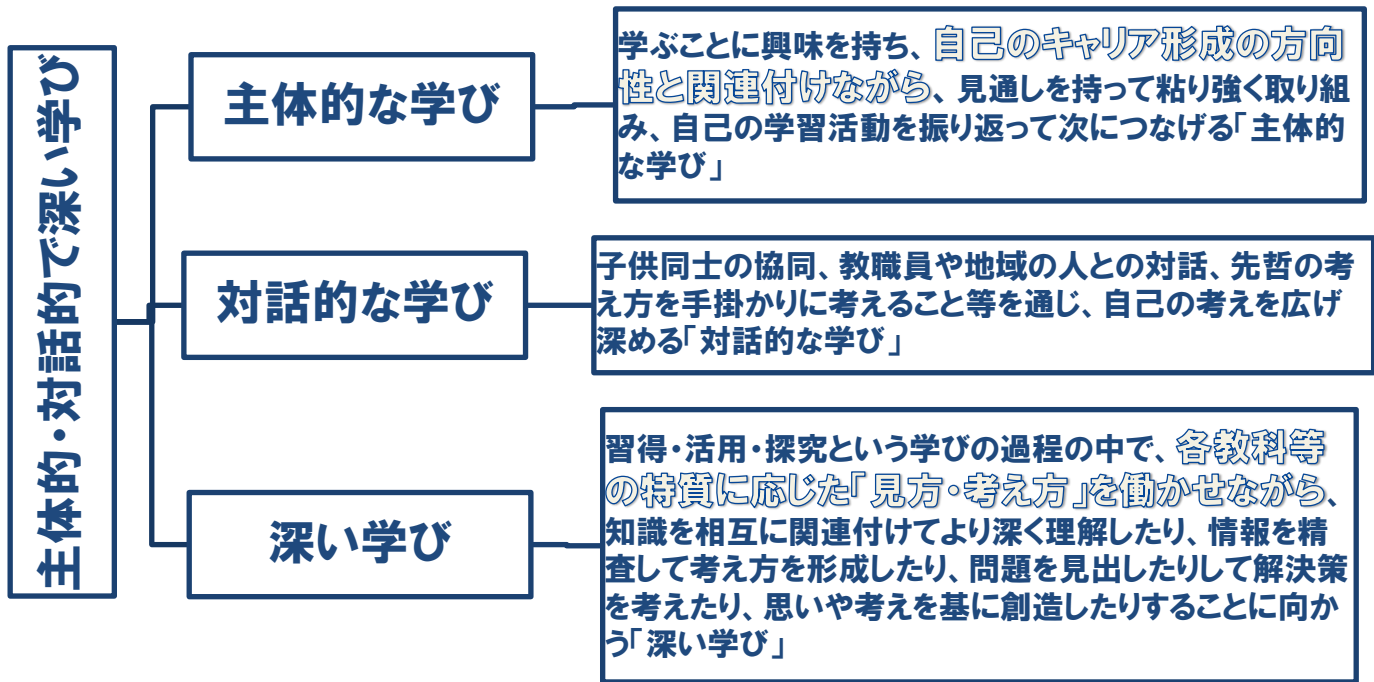
という単純な定義から離れて、もう少し深い意味を理解していただく時期に来たと思います。今回の藤田教授の講演の中でもこの「主体的で対話的で、深い学び」の3つの概念をキャリア教育の視点から捉えなおそうという示唆に富んだ意見が出されていました。このことを今から紹介したいと思います。この藤田教授の意見を図式で表したのが、次の図です。

解説すると（要らないかもしれませんが）、アクティブラーニングは、当初は座学で教師の授業をただ聞いている「トーク&チョーク」の授業の対極にある授業というイメージで捉えられていて、とにかく、ペアワークだ、グループワークだ、プレゼンだ、というような「形」先行のイメージで捉えられていました。しかしながら大学での研究は、もっと先にすすんでいて、「アクティブラーニングとは、そんなものではない」というのはずっと警鐘されて続けていたのです。今回の森朋子先生を招いての研修もこのあたりの理解を進めてもらうのがねらいです。そうすると、同じ形のグループワークでも、先生方の指導の質が深まると思います。

さて、藤田教授の話です。ポイントは、大きな文字で示しています。「主体的な学び」とは、単に積極的にグループワークをしているとかという次元ではなく、先ほどの溝上教授の「二つのライフ」をどこまで自覚して学習に向かっているかがポイントであるということがわかると思います。それが、

「自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、」

という文言に表れています。



「対話的な学び」というのも、「子供同士の協働」だけではなく、「教職員や地域の人との対話、それに先哲の考え方を手掛かりに・・・」というように、「対話的学び」を単にグループワークやペアワークというせまい解釈をしていません。そこで、一つ面白い実践例を紹介しましょう。これをいつか私はやってみたいと思っています。特に効果的なのは、自治会執行部や各クラスの学級委員を集めたリーダー合宿などで実施すればいいのではと、ひそかに構想を温めていたプランです。それは、「NPO 法人～だっぴ～」の実践です。岡山県のNPO 法人です。「NPO法人～だっぴ～」で検索すると webpage があります。どんな取組かを webpage にある山陽女子高校で紹介します。



2014年9月20日。山陽女子高校の講堂に、おとな31名と高校生42名が集まりました。どきどきとわくわくが会場をざわめかせ、緊張の面持ちではじまりの時を待ちます。

10:00～ オープニング

オープニング！高校生リーダーが元気にごあいさつ。集まってくれた方への感謝と、だっぴへの想いを伝えました。

続いてアイスブレイク。だっぴで大切にしている“人間同士のフラットな関係”をつくるため、簡単なゲームで体とこころの緊張をほぐします。

10:35～ トークセッション

笑顔が見え始めたところで、スケッチブックを持ってトークセッションへ。

8名程度のグループに分かれまずは自己紹介。司会の出すテーマにそって、おとなと高校生が互いに話し・聞き合います。テーマは「好きなおでんの具」など話しやすいものから、「生き方・働き方」など徐々に深めていきます。



ふだん話す機会がない人たちと真摯に対話することで、新たな価値観や知らなかった自分に出会うことができます。

各グループには大学生の進行役が入り、意見を引き出し、テーマを深めるサポートを行います。

またスケッチブックを使うことでみんなの考えを見える化。特定の人が話すのではなく、それぞれのスタンスで話したり聞いたりすることができます。

たくさんの人と出会えるように、今回は約50分のトークを、4回グループを変えながら行いました。

詳しくは、だっぴのwebpage を見てください。とにかく、やろうとしているのは、大学生や地域の人たちと真剣に話をし、新たな価値観に出会い、今までの自分の価値観に揺さぶりをかけ、「**新しい自分に、だっぴ!**」なのです。この取組は、私が大学院の講義で岡山に出張したときに、「岡山の取組で面白いものがあるよ」と講義担当の諏訪教授から教えてもらったものです。大阪を離れると、ホント新たな発見があります。

この取組に良く似たものを、私は藤原和博さんから教えてもらいました。彼が■■■高校で「よのなか科」の授業をしたときに、校長室で話を聞かせてもらったのです。藤原さんは、「学校には、教師⇄生徒という縦の関係と生徒⇄生徒という横の関係しかない。これでは弱い。だから私は地域のおじさん、おばさん、お兄さんお姉さんに学校に来てもらって、どんどん生徒に関わってもらった。これを私は、『ナナメの関係』と言っています。」なぜ、「ナナメの関係」が良いかというと、

①**地域の人たちや大学生達は、直接生徒と利害関係はないから、生徒の考えを否定しない（「教師はすぐに指導的立場に立って生徒の意見を否定するから、この取組に一番へたくそで不向き」と藤原さんは言っていました）**

②**そして、このだっぴの取組みと同じく、新たな価値観に出会える**

というものです。こういう取組も私は「対話的な学び」の一つの形であると思います。実は、私はこのNPO 法人の代表の方に連絡を入れて「会えないか」と言ったところ、「たまたま大阪に来る用事があるから行きますよ」と事務局長の森分氏と校長室で話をしました。話をする中で、「難しいな・・・」と思ったことは、一つの学年でやるとしてもスタッフを用意するのが大変という事です。だから、先ほどいったように、学年や学校のリーダーとして育てたい生徒達のリーダー合宿なるものの中で体験させてあげれば、その生徒達の体験や経験が徐々にでも浸透していくのではないかと考えています。

最後の「深い学び」です。この図の中の語句として、「見方・考え方」というのがあります。この見方・考え方について、藤田教授が紹介した中教審答申の中にこのように書かれています。

「見方・考え方」には教科等ごとの特質があり、各教科等を学ぶ本質的意義の中核をなすものとして、教科等の教育と社会をつなぐものである。子供たちが学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせられるようにすることこそ、教員の専門性が発揮させることが求められる。

ここで注目すべきは、下線部の「各教科の本質的意義」ということでしょう。この点についても中教審答申は次のように述べています。

子供たちに必要な資質・能力を育てていくためには、各教科等での学びが、一人一人のキャリア形成やよりよい社会づくりにどのようにつながっているのかを見据えながら、各教科をなぜ学ぶのか、それを通じてどういった力が身に付くのかという、教科等の学ぶ本質的な意義を明確にすることが必要になる。

そこで、藤田教授の問いに戻るのです。

「みなさん、生徒にこんなことを聞かれたら、どう応えますか？『先生、なんでこんなこと勉強しなければならないのですか？』と」

この藤田教授のキャリア教育の視点からの問いかけは、私が以前校長通信で紹介した松下教授の「本質的な問いと永続的理解とは何か？」という問いかけに通じるものです。なぜ、〇〇教科●●科目■■■分野を勉強しなければならないのか、それを真剣に考え、生徒に語る事が求められていると思います。指数・対数関数はなぜ勉強しなければならないのでしょうか。源氏物語はなぜ勉強しなければならないのでしょうか。藤田教授の話はまだまだ続きがあります。またの機会に紹介します。

この通信の文字数：10550文字。400字詰め原稿用紙26枚以上。何日で書いたと思います？6月29日半日と6月30日の半日です。奨学金と不祥事に関する経過のまとめと府教育庁への報告書は、すでに20000字近くになっています。今後のことを考えると、優に25000字は超えるでしょう。これを通常の校長業務をやりながら、生徒からの聞き取りをやりながら、家庭訪問で謝罪をしながら書くという作業をしています。このような不祥事が起これば、校長室で校長はこんな仕事をしていると知っていただきたいね。